

『三国志演義』版本の研究

— 「関索」系諸本の相互関係 —

中 川 諭

序

『三国志演義』の版本について、鄭振鐸が「三国志演義的演化」の中で、「嘉靖本以後の諸本はすべて嘉靖本を祖本とし、外見上の変化のみで内容にはまったく違いはなく、清代に到り毛宗崗によって初めて大きく改められた」と述べて以来、この見解が定説として広く認められてきた。そして、これ以後『三国志演義』の版本研究はあまり活発ではなかった。しかしこの見解に反論がなかったわけではなく、小川環樹博士は、「関索の伝説そのほか」において、嘉靖本以後毛宗崗本成立以前の段階で、すでに嘉靖本にはみられない関羽の架空の息子関索の物語が挿入されており、さらに関索の物語について違った形を伝える異本も存在することを指摘された。そしてごく最近になって、金文京氏・上田望氏・周兆新氏そして筆者が相次いで『三国志

演義』の版本についての研究を発表し、これらの研究によって、『三国志演義』にも数多くの版本が存在し、それらは内容によっていくつかのグループに分けられることが明らかにされた。

ところで、これまでの『三国志演義』の版本研究により、筆者は、『三国志演義』の諸版本は、三系統に分けられると考える。すなわち、

- 一、十二卷系諸本 (二十四卷本を含む)
- 二、二十卷「花関索」系諸本
- 三、二十卷「関索」系諸本

である。上田氏は諸本の異同を検討して一つの系統図を示されているが、特に本稿で取り上げる「関索」系諸本については、「各版本間で繁簡にずれがあるので、この中どの本がどの本を襲用したと言うような縦の継承関係はない」と述べているにとどまり、諸本間の具体的な関係に

ついではまだ明らかにされていない。筆者は、十二卷系・二十卷「花関索」系の二つの系統に属する諸本についてはある程度明らかにしたので、本稿では三番目の系統、すなわちいわゆる「関索」系諸本と呼ばれる版本群の相互関係について述べてみたい。なお、本稿で取り上げる版本は次の通り。(一)内は略称。以下略称を用いる。

- ①新刻京本補遺通俗演義三國全伝 二十卷〔誠徳堂本〕
熊清波誠徳堂刊。「重刊杭州攷正三國志傳序」・万曆二十四年の刊記あり。概ね全葉本文となっているが、時折(おおよそ四葉おきであるが、必ずしも一定していない)上図下文となっている。全葉本文の場合半葉十四行行二十八字。上図下文の場合半葉十四行行十九字。国立北平図書館(現台湾故宮博物院?)・お茶の水図書館成篋堂文庫蔵。孫楷第「中国通俗小説書目」(以下孫目と略)著録。

- ②新銓全像大字通俗演義三國志伝 二十卷〔劉龍田本〕
劉龍田喬山堂刊。封面に「全像英雄三國誌傳／笈郵齋藏版」と題する。「序三國志傳」・「新銓全像三國志傳君臣姓氏付録」がある。上図下文、半葉十五行、每半葉両辺各一行行三十五字、中間十三行行二十五字。オックスフォード大学図書館蔵。孫目著録。

- ③新刻音釈旁訓評林演義三國志史伝 二十卷〔朱鼎臣

本〕

卷十三卷頭に「古臨 冲懷 朱鼎臣 輯」、卷十四卷頭に「羊城 冲懷 朱鼎臣 編輯」とある。人名目録あり。上図下文、半葉十四行每半葉両辺各一行行三十二字、中間十二行行二十四字。ハーバード大学燕京図書館蔵。孫目著録。

- ④新刻京本按鑑演義合像三國志伝 二十卷〔天理図本〕
出版者・書肆名・校訂者名などは不明。上図下文であるが、一葉の裏の図と次葉表の図をあわせて一枚の図となる。半葉十五行、図像の片側七行行三十二字、図像の下八行行二十二字。天理大学図書館蔵。孫目未著録。

- ⑤新刻攷訂按鑑通俗演義全像三國志伝 二十卷〔黄正甫本〕
黄正甫刊。「癸亥」(天啓三年、一六三三年)の年を

記す。「三國志序」・「全像三國全編目錄」・「銓全像演義三國志君臣姓氏付録」がある。上図下文、半葉十五行、每半葉両辺各二行行三十四字、中間十一行行二十六字。北京図書館蔵。孫目著録。

- ⑥新刻按鑑演義全像三國英雄志伝 二十卷〔楊美生本〕
楊美生刊。封面には「新銓全像三國演義／書林楊美生梓」と題する。「叙三國志傳」・「全像三國志傳目錄」

がある。上図下文、半葉十六行、每半葉両辺各三行行三十六字、中間十行行二十九字。大谷大学蔵。孫目著録。

⑦ 二刻按鑑演義全像三國英雄志伝 二十卷 [魏□本]

卷一・二・三のみ存する。破損が甚だしく、書肆の姓が「魏」であることだけは読み取れる。上図下文、半葉十五行、每半葉両辺各三行行三十六字、中間九行行二十九字。北京図書館蔵。孫目未著録。

⑧ 新刻全像演義三國志伝 二十卷 [北京図本]

巻五・六・七のみを存する。書肆名・出版者名などは不明。上図下文、半葉十五行、每半葉両辺各三行行三十六字、中間九行行二十九字。北京図書館蔵。孫目未著録。

⑨ 精鑄按鑑全像鼎峙三國志伝 二十卷 [劉栄吾本]

劉栄吾藝光閣刊。卷一〜十一、卷十六〜二十のみ存する。「全像三國志傳目次」・「君臣姓氏附」・図像半葉がある。上図下文、半葉十五行、每半葉両辺各三行行三十四字、中間九行行二十七字。大英博物館蔵。孫目未著録。

⑩ 新刻按鑑演義京本三國英雄志伝 六卷 [聚賢山房本]

聚賢山房刊。封面に「己丑年新刻／毛聲山先生原本／繡像三國志傳／聚賢山房藏板」と題する。「三國志小

引」・「新刻三國志目錄」・図像十二葉がある。「三國志小引」の版心下方に「竹秀山房」と、巻五第二十一葉版心下方に「西堂」とある。半葉十五行行三十二字。

復旦大学図書館・東京大学東洋文化研究所蔵。孫目未著録。封面に「毛声山先生原本」とあるから、毛宗崗本刊行以後に刊行されたに違いあるまい。毛宗崗本の成立は康熙五年以前であろうから、封面の「己丑年」は早くとも康熙四十八年（一七〇九年）である。

一

本稿で取り上げる「関索」系諸本は、いわゆる「関索説話」を持つこと、文章が他の系統に比べてやや簡略であること、の二点が共通の性格として指摘できる。しかしこの一つの系統の中でさらに二つのグループに分けることができるのである。まずこのことを示してみたい。なお順序として、⑧北京図本・⑩聚賢山房本を除く八種の版本が二つのグループに分けられることを示し、それからこの二種の版本がどちらのグループに属するかを考えたい。これは北京図本は巻四・五・六しか存しないこと、聚賢山房本はやや特殊な性格を持っている（後述）ことによる。

最初の例は劉備初登場の場面である。朱鼎臣本は次のように描写する。

○例一 卷一(1) 「祭天地桃園結義」

涿縣樓桑村一個英雄。愛音樂、美服、少言語、禮下於人、好交遊天下豪傑、素有大志、身長七尺五寸、兩耳垂肩、雙手過膝、龍眉鳳眼、面如貫玉、唇若塗朱。中山靖王劉勝之後、漢景帝玄孫、姓劉名備字玄德。昔劉勝之子劉眞、漢武帝元狩六年、封爲涿縣陸城侯、因此一支流落在涿縣。玄德祖劉雄、父劉弘曾舉孝廉、州郡爲吏。弘早喪、玄德事母至孝。家貧販履織席爲業。玄德草舍有株樹、高五丈餘、枝葉茂盛、重重如車蓋。人皆言樹非凡。相者李定曰「此家必出貴人。」玄德幼時與鄉中小兒戲于樹下曰「我爲天子、當乘此羽葆蓋車。」叔父戒之曰「汝忽妄言、滅吾門也。」年十五歲、與同宗劉德然・遼西公孫瓚爲友、德然父劉元起見玄德家貧、常資給之。元起妻曰「各自一家、何能濟也。」元起曰「宗中此人非常也。」中平元年涿郡招軍時、玄德二十八歲。立於傍下、嘆聲而回。後有一人厲聲言曰「大丈夫不與國家出力、何故長嘆耶。」

引用箇所、誠徳堂本・劉龍田本・天理図本・黄正甫本は、ほぼ同じである。まず劉備の外見の描写があり、そして劉備の先祖について述べ、続いて劉備の幼い頃のエピソードが描かれる。それからもとのストーリーの描写にもどり、一人の男(張飛)に声をかけられる、となっている。とこ

ろが、楊美生本は次のようになってる。

○例二(2) 「祭天地桃園結義」

涿縣樓桑村一個英雄。生得身長七尺五寸、兩耳垂肩、雙手過膝、龍眉鳳眼、面如冠玉、唇若塗朱。乃中山靖王劉勝之後、漢景帝玄孫、姓劉名備字玄德。年二十八歲。立於傍下、長嘆一聲而回。後有一人厲聲言曰「大丈夫不與國家出力、何故長嘆耶。」

引用箇所、魏□本・劉榮吾本はほぼ同じである。これを先の朱鼎臣本の文章と比較すると、劉備の先祖や幼い頃のエピソードについての記述がない。また同様に、この後の曹操・孫堅が初めて登場する場面でも、朱鼎臣本には曹操・孫堅の先祖や幼い頃のエピソードが描かれているが、楊美生本にはそれがない。これら劉備・曹操・孫堅の先祖や幼い頃のエピソードは、嘉靖本など十二卷系諸本や余象斗本など「花関索」系諸本にも見られるものであるから、朱鼎臣本の増補というより、楊美生本の削除であろう。このように「関索」系諸本の中には、全体のストーリーの展開に直接関わらない話を削除したものがあつた。

次の例。劉備・関羽・張飛が黄巾賊討伐のため盧植のもとに駆けつけたが、盧植は讒言に遭い捕らえられる。三人はしかたなく涿県に戻ろうとするが、その途中、董卓が黄巾賊に襲われているのに出会う。比較対照するために、余

象斗本も掲げる。(版本間の違いがわかりやすいように、適宜空白をあけた。以下同じ。)

○例二 卷一 「劉玄德斬寇立功」

余象斗本	朱鼎臣本	楊美生本
行到二日、忽聞山後 喊聲大舉、殺氣遮天、 玄德引關・張縱馬上 高崗望之、見漢兵大 敗、後面漫山塞野盡 地而來。旗號大書 「天公將軍」。	行到二日、忽聞山後 喊聲、 玄德 見漢軍大 賊兵 大敗 賊陣中乃	喊聲、 玄德 縱馬 忽聞山後
玄德曰「此必是張角 也。可速戰之。」三 人飛馬引兵鼓譟而 出。張角正殺敗董卓、 乘勢趕來。忽見山背 後一彪人馬飛出、當 先玄德、左有關羽、 右有張飛衝殺出。角 軍大亂、趕退五十餘 里、救了董卓回寨。	人飛殺進。 三 人飛馬 而 出。張角正 敗董卓、 乘勢趕來。	玄德 領關・ 張 衝殺。 救了董卓回寨。

引用箇所、誠徳堂本・劉龍田本・天理図本・黄正甫本は朱

鼎臣本と、魏□本・劉榮吾本は楊美生本と、それぞれほぼ同じである。三種の版本のこの部分を比較してみると、朱鼎臣本・楊美生本ともに余象斗本に比べて文章が簡略になつており、かつそこに用いられている語彙はおおよそ余象斗本に用いられているものを踏襲していることがわかる。しかし一方で朱鼎臣本の方が楊美生本よりも簡略になつているともいえる。つまり両者の間で簡略のしかたが異なつているのである。ここでは朱鼎臣本の方が簡略になつている例を示したが、逆に楊美生本の方が簡略になつている例も指摘することができる。

以上のように、「関索」系の系統に属する諸本は、いわゆる「関索説話」を持つこと、文章が他の系統と比べて簡略になつていること、という共通の性格を持ちながら、故事の有無・文章の簡略のしかたの二点から、さらに二つのグループに分けることができるのである。すなわち、その一つが誠徳堂本・劉龍田本・朱鼎臣本・天理図本・黄正甫本の五本、もう一つが楊美生本・魏□本・劉榮吾本の三本である。そしてそれぞれのグループを、その書名から、前者を「志伝グループ」、後者を「英雄志伝グループ」と呼ぶことにしたい。

では続いて、北京図本・聚賢山房本が「志伝グループ」・「英雄志伝グループ」のどちらに属するかを示してみたい。

例に挙げる個所は、水鏡先生司馬徽が新野の劉備のところ
にやってきて諸葛孔明の人となりを語る場面である。

○例三 卷七 「劉玄德三顧草廬」

朱鼎臣本	楊美生本	北京図本	聚賢山房本
此四人各務精 熱、惟孔明獨觀 大略、抱膝長笑 曰「汝欲仕進可 至刺史、郡守 也。」衆都問其志 若何。孔明笑而 不答。可見其人 之志也。	此四人 務在精 熱、惟孔明獨觀 大略、抱膝長 吟。	此四人 務在精 熱、惟孔明獨觀 大略、抱膝長 吟。	此四人 務在精 熱、惟孔明獨觀 大略、抱膝長 吟。

引用個所、聚賢山房本は卷二。ここで、朱鼎臣本と楊美生
本を比べてみると、大きな違いとしては、朱鼎臣本にはあ
る「曰「汝欲仕進」」以下の文章が楊美生本にはない点が
指摘できよう。そこで北京図本・聚賢山房本を見ると、兩
本ともほぼ楊美生本と同様であることがわかる。そしてこ
のような傾向は作品全体にわたってみられるものである。
すなわち、北京図本・聚賢山房本は楊美生本と同じ「英雄
志伝グループ」に分類することができるのである。

二

それでは具体的に各版本の相互関係を見ていくことにす
る。まず「志伝グループ」に分類した五本を取り上げる。
この五本の文章は、前節で示したようにほぼ同じように
なっているのだが、それでも中にはやや違いがある。最初
にその傾向を示してみよう。場面は、劉備が関羽・張飛を
引き連れて朱雋の配下に加わって、黄巾賊と戦っているこ
ろである。

○例四 卷一 「安喜縣張飛鞭督郵」

誠德堂本	劉龍田本	朱鼎臣本	天理図本	黃正甫本
雋曰「此妖 術也。來日 可宰猪羊血、 令軍士伏於 山頭、候賊 趕來、高坡 上 之、其法可 解。」令關 張 各引 軍一千、伏	雋曰「此妖 術也。來日 可宰猪羊血、 令軍士伏於 山頭、候賊 趕來、 即以血潑 之、其法可 解。」玄德依 計而行。	雋曰「此妖 術也。來日 可宰猪羊血、 令軍士伏於 山頭、候賊 趕來、 即以血潑 之、其法可 解。」玄德依 計而行。	雋曰「此妖 術也。來日 可殺猪羊血、 令軍士伏於 山頭、候賊 趕來、高坡 上 之、其法可 解。」令關羽 張飛各引軍 一千、伏于	雋曰「此妖 術也。來日 可宰猪狗血、 令軍士伏於 山頭、候賊 趕來、高坡 上將血潑之、 其法可解。」 令關羽張 各引軍

齊濤。	穢物	穢物	穢物	齊濤。	齊濤。	齊濤。	齊濤。
於兩山之上、	穢物	穢物	穢物	穢物	穢物	穢物	穢物
盛猪羊血並	穢物	穢物	穢物	穢物	穢物	穢物	穢物
穢物準備。	穢物	穢物	穢物	穢物	穢物	穢物	穢物
次日張寶搖	穢物	穢物	穢物	穢物	穢物	穢物	穢物
旗播鼓、	穢物	穢物	穢物	穢物	穢物	穢物	穢物
引軍擗戰。	穢物	穢物	穢物	穢物	穢物	穢物	穢物
玄德披掛上	穢物	穢物	穢物	穢物	穢物	穢物	穢物
馬、引軍出	穢物	穢物	穢物	穢物	穢物	穢物	穢物
戰。張寶又	穢物	穢物	穢物	穢物	穢物	穢物	穢物
作法、平地	穢物	穢物	穢物	穢物	穢物	穢物	穢物
風雷大作、	穢物	穢物	穢物	穢物	穢物	穢物	穢物
飛沙走石、	穢物	穢物	穢物	穢物	穢物	穢物	穢物
人馬自天而	穢物	穢物	穢物	穢物	穢物	穢物	穢物
下。玄德撥	穢物	穢物	穢物	穢物	穢物	穢物	穢物
馬便走。張	穢物	穢物	穢物	穢物	穢物	穢物	穢物
寶人馬趕來	穢物	穢物	穢物	穢物	穢物	穢物	穢物
山頭一聲砲	穢物	穢物	穢物	穢物	穢物	穢物	穢物
響、軍將	穢物	穢物	穢物	穢物	穢物	穢物	穢物
齊濤。	穢物	穢物	穢物	穢物	穢物	穢物	穢物

引用した部分は、五本とも、劉備が朱雋に張宝の妖術を破る方法を聞き、翌日それを実行する、という内容である。しかし劉龍田本・朱鼎臣本の文章は、他の三本に比べてや

や短くなっている。たとえば、誠徳堂本・天理図本・黄正甫本では「令関(羽)・張(飛)各引軍一千、伏於兩山之上、盛猪羊血並穢物準備。」となっているところが、劉龍田本・朱鼎臣本ではただ「玄德依計而行。」とあるだけであり、また翌日の張宝との戦いで張宝が術を用いたところで、誠徳堂本など三本は「平地風雷大作、飛沙走石、人馬自天而下」と張宝の妖術を描写しているが、劉・朱両本にはそれが無い。同様の例は引用部分の中でもさらにいくつか指摘できる。「志伝グループ」として分類した五本の間の差異は、おおよそのような傾向にある。したがって、「志伝グループ」五本の中では、誠徳堂本・天理図本・黄正甫本の三本が、そして劉龍田本・朱鼎臣本の二本が、それぞれ近い関係にあるといえよう。

それでは、誠徳堂本・天理図本・黄正甫本の三本は、また劉龍田本・朱鼎臣本の二本は、それぞれどのような関係にあるのだろうか。

まず誠徳堂本・天理図本・黄正甫本の関係を考える。煩雑さを避けるため、先に誠徳堂本・天理図本の関係を示し、それから黄正甫本について見ていくことにする。次の例は、曹洪が漢中で马超と対峙している時、張郃が巴西を落として一気に蜀を攻めようとする。巴西を守っているのは張飛。張郃は張飛を攻めたが敗れ、撤退して撃つて出ようとしな

い。張飛は張郃に出てこさせようと、兵士たちに何度も張郃を罵らせた。

○例五 卷十二 「瓦口張飛戰張郃」

誠徳堂本	張飛令軍士大罵、張郃三次不出。
天理図本	張飛令軍士大罵、張郃三次不出。雷 飛令雷同搦戰、郃又不出。雷同 同驛軍士上山、山頭播木砲石打 驛軍 上山、山頭播木砲石打 來、折了數人、 盪 來、折軍數千、雷同急退、被盪 石・蒙頭兩寨兵戰、飛・同大敗 石・蒙頭兵殺敗雷同。 不出。

引用箇所、天理図本では、張飛が兵士に張郃を罵らせても、張郃は出てこない。そこで雷同に戦いを挑ませるが、またも張郃は出てこない。雷同は山を駆け上がるが、山頂からの攻撃で雷同は退散する、となっている。しかし誠徳堂本を見ると、天理図本にはある「飛令雷同搦戰、郃又不出。」の十文字がない。そのため誠徳堂本では雷同がいきなり山を登って攻めていくことになり、やや唐突な描写ではないかと思う。しかも、誠徳堂本にはない十文字は、二度出てくる「不出」の二文字に挟まれた部分であり、その「不出」の二文字を混同した誠徳堂本における脱誤といえよう。すなわちこの例から、天理図本から誠徳堂本が出たという可

能性が考えられる。

次の例。ある宴席で董卓が少帝を廃して陳留王を帝位につけようと諮るが、諸官に反対される。宴が終わり解散後、董卓は諸官を脅そうと門の前に立ちほだかる。

○例六 卷一 「呂布刺殺丁建陽」

誠徳堂本	百官皆散。董卓按劍 立于園門外、意欲傷 害百官。忽見呂布躍 馬持戟、於園門外往 來。卓問李儒曰「此 何人也。」	天理図本	百官皆散。董卓按劍 立於園門外 往 馬提戟、於園門外往 來。卓問李儒曰「此 何人也。」	黄正甫本	百官皆散。董卓按劍 立于園門外、意欲傷 害百官。忽見呂布躍 馬提戟、於園門外往 來。卓問李儒曰「此 何人也。」
------	---	------	---	------	---

ここで誠徳堂本と天理図本を比較すると、天理図本には誠徳堂本の「意欲傷害百官。忽見呂布躍馬持戟、於園門外」の十八字がない。これでは董卓がわけもなく「これは誰だ。」と訊ねることになり、意味をなさない。しかもこの十八字は「園門外」の三文字に挟まれた部分であるから、天理図本の脱誤とみて相違あるまい。したがってこの例から、誠徳堂本から天理図本が出たという可能性が考えられる。

以上のように、誠徳堂本と天理図本の誠徳堂本には、例五のような場合と例六のような場合が同時に指摘できる。

このことから誠徳堂本と天理図本は継承関係にあるのではなく、ある一つの祖本から分かれた横の関係にあるといえよう。

次に黄正甫本について見てみよう。もう一度例六を見ると、天理図本には十八字の脱落があったが、黄正甫本には天理図本のような脱落はなく、誠徳堂本同様正しい文章である。つまり黄正甫本の文章は天理図本よりも誠徳堂本の方に近いといえる。もう一つ別の例を挙げよう。少帝と陳留王は賊によつて洛陽から連れ去られたが、諸將に助けられ無事帰還。この頃から董卓は陳留王を帝位につけて実権を握ろうと企み始める。

○例七 卷一 「董卓議立陳留王」

誠徳堂本	天理図本	黄正甫本
董卓招誘 部兵。	董卓招誘何進・何苗 部兵。	董卓招誘 部兵。
召李 儒問曰「吾欲廢帝立 陳留王、此事若 何。」	召李 李儒問曰「吾欲廢帝 立陳留王、此事若 何。」	召李 李儒問曰「吾欲廢帝 立陳留王、此事若 何。」

ここで三本の文章を比較すると、天理図本の「何進・何苗」が誠徳堂本・黄正甫本では単に「何苗」であり、また天理図本の「尺牘掌握」が誠徳堂本・黄正甫本にはない。つま

りここでも黄正甫本は天理図本よりも誠徳堂本に近いといえる。

しかし、この三本の間には次のような例もある。場面は、政権を掌握した司馬昭は、淮南の諸葛誕のみ心服していないので、偽の詔書で諸葛誕を洛陽に呼び寄せた。諸葛誕が洛陽に来て、門は閉じたまま。

○例八 卷十九 「司馬昭破諸葛誕」

誠徳堂本	天理図本	黄正甫本
及至南門、 見城門緊閉、 橋曳起、誕 城下、 曰「吾早晚 暫出遊戯一遭、何爲 閉門 不出。汝等欲 反乎。」 城上並無一人應	只 至於南門、 見城門緊閉、 橋曳起、誕 城下、 曰「吾早晚 暫出遊戯 爲 何閉門 不出。汝等欲 反耶。」 城上並無一人答	只 來及至南門城下、但 見城門緊閉、又將吊 橋曳起、誕引衆將至 城下、勒馬揚鞭大叫 曰「吾早晚要回洛陽、 暫出遊 一遭、何故 緊閉城門、曳起吊橋 而不出。汝等欲據邑 以叛乎。」再三逼 門、城上無一人回

この例では、黄正甫本の文章が誠徳堂本・天理図本よりも詳しくなっている。たとえば、黄正甫本の「曳起吊橋而」

や「據邑以」・「再三逼問」という文字が誠徳堂本・天理図本にはみられない。しかしこれらの文字は誠徳堂本・天理図本だけでなく、十二卷系諸本・「花関索」系諸本にも見られないものなのである。

ところで黄正甫本には「癸亥」年の叙があった。この「癸亥」は天啓三年（一六二三）に違いあるまい。つまり黄正甫本の刊行は天啓年間なのであり、誠徳堂本（万曆二十三年の刊記あり）の刊行よりもやや遅れるだろう。したがって例八のような場合、黄正甫本を簡略にして誠徳堂本ができたというのではなく、誠徳堂本のような文章に加筆して黄正甫本のような文章ができたと考えべきである。

続いて劉龍田本と朱鼎臣本の関係について考える。荆州の劉表と仲たがいの孫堅は、襄陽で蔡瑁と争っていた。

○例九 卷二 「孫堅跨江戰劉表」

劉龍田本	忽一日、狂風驟起、將中軍帥字旗竿吹折。程普曰「此不祥之兆也。」運到帳中見孫堅曰「中軍帥字旗被風吹折。於軍不利、可以班師。」堅怒曰「吾累戰累勝、取襄陽只在旦夕、豈可因風吹斷旗竿而罷兵耶。」
朱鼎臣本	忽一日、狂風驟起、將帥字旗以班師。」堅曰「吾累戰累勝、取襄陽只在旦夕、豈可因風吹斷旗竿而罷兵耶。」

この例をみると、朱鼎臣本には脱落があり、このままでは文意が通らない。しかもこの脱落は、二度出てくる「中軍帥字」に挟まれた部分であるから、「中軍帥字」の混同によって生じた誤りといえよう。したがってこの例から、劉龍田本から朱鼎臣本が出た可能性が考えられる。

次の例。曹操は張繡の征伐に向かった。張繡は曹操が来るのを知るや、南陽城に籠もった。曹操は南陽城を囲み、攻める準備をしている。

○例十 卷三 「曹操會兵攻袁術」・「決勝負賈詡談兵」

劉龍田本	操令兵運土填壕、又令布袋兜土並柴草、堆作梯登、又立雲梯窺望。操自騎馬遠城觀看。
朱鼎臣本	操令兵運土填壕、又用布袋袋土並草、堆作梯登、又立雲梯窺望。操自騎馬遠城觀看。三日、令軍於西北角上堆柴柴薪、將士會集上城。詡與繡曰「某知操意、可將計就計、令操自棄兵而走。」

〔改則〕

三日、見東南角上有二新舊不等之屋鹿角、多年朽爛。意在此處入城。……	張繡曰「何以知之。」詡曰「見操自遠城三日、見東南上有二新舊不等之屋鹿角、多年朽爛。意在此處入城。……」
-----------------------------------	---

ここで劉龍田本と朱鼎臣本を比べると、劉龍田本に脱落が

あることがわかる。しかもこの脱落は、朱鼎臣本で二度で
てくる「三日」の二文字を混同して脱落したものに違いな
く、さらに改則の個所と則題を含んで脱落しているのだけ
ら、劉龍田本の脱誤といえる。したがってこの例から、朱
鼎臣本から劉龍田本が出たという可能性が認められる。

このように、劉龍田本と朱鼎臣本の間には例九・例十の
ような例が同時に存在することから、劉龍田本と朱鼎臣本
はある一つの版本を祖本とする横の関係にあると考えられ
よう。

三

本節では「英雄志伝グループ」に属する諸本の関係につ
いて考える。

まず楊美生本と魏□本を取り上げる。この両者の文章を
比較してみたところ、(もちろん魏□本の残存する個所だ
けであるが) 大差はない。わずかな文字の異同が存するの
みである。したがって文章からこの両者の関係はわからず、
別の面から考察しなければならない。

そこで、両者の書名に注目してみよう。楊美生本の巻頭
書名は「新刻按鑑演義全像三国英雄志伝」であり、魏□本
は「二刻按鑑演義全像三国英雄志伝」であって、両者の巻
頭書名の違いは「新刻」か「二刻」かの違いだけである。

つまり書名からすると、楊美生本から魏□本ができたと思
えらる。
次に挿図を見てみよう。ここには楊美生本の巻一、十六
葉裏・十七葉表、魏□本の巻一、十七葉裏・十八葉表・裏
の挿図を掲げる。

○楊美生本 (大谷大学所蔵)



1 · 16 b



1 · 17 a

1. 17 b



1. 18 a



1. 18 b



ここに掲げた挿図の、楊美生本巻一の十六葉裏と魏□本巻一の十七葉裏、同じく十七葉表と十八葉裏をそれぞれ比較してみると、両者の挿図の構図は非常に酷似している。そして魏□本の挿図のほうが楊美生本の挿図より劣っている。したがって魏□本の挿図は楊美生本の挿図をそのまま用いて新たに版木を刻したものと思われる。ただ楊美生本と魏□本ではやや版式が異なるため、魏□本では挿図と文章で少しずづブレが生じてくる。そして半葉分ズレが生じたところで、十八葉表の挿図のように、楊美生本にはない挿図を補っているのである。

以上のように、楊美生本と魏□本の間には、文章・文字の異同が極めて少ないこと、巻頭書名に「新刻」「二刻」の違いしかないこと、挿図は構図が酷似しながら魏□本のほうが劣っていること、の三点が指摘できる。これらのことから、魏□本は楊美生本の重刻本であると思われる。もしそうでないとしても、楊美生本と魏□本は非常に密接な関係にあることは疑いあるまい。

次に楊美生本と劉榮吾本の関係を見ていこう。伝国の玉璽を拾った孫堅がそれを持って江東に帰ろうとした時、袁紹から知らせを受けた劉表が孫堅の帰途を遮った。

○例十一 巻一 「袁紹孫堅奪玉璽」

楊美生本 表與袁紹至好、隨即差蒯越・蔡瑁引兵一万出城攔住。孫堅問曰「汝何故領兵截去路。」越曰「汝如何盜傳國玉璽。即忙納下、放汝過去。」堅怒、令黃蓋出馬。蔡瑁戰數合、瑁勒馬便走。孫堅乘勢殺過界口。	劉榮吾本 即差 蒯越・攔住。
--	-------------------

この例を見ると、劉榮吾本の文章は楊美生本よりも短くなっている。劉榮吾本のままの意味は通じるから、劉榮吾本の脱誤と速断はできない。しかし、楊美生本には見られ劉榮吾本では欠けている「孫堅問曰『汝何故領兵截去路。』越曰『汝如何盜傳國玉璽。即忙納下、放汝過去。』」の部分は、前後二度出てくる「(孫) 堅」を混同して生じた誤りである可能性もあり、また引用箇所は「関索」系諸本において劉榮吾本を除く全ての版本で楊美生本のようになっている(十二卷系・「花関索」系諸本ではもっと詳しい)。したがって楊美生本の方が「関索」系諸本としてはもとの形であり、楊美生本から劉榮吾本が出た可能性が考えられる。もう一つの別の例を挙げよう。趙雲がそれまで仕えていた袁紹を見限り、公孫瓚に投降してきたところである。

○例十二 卷二 「趙子龍盤河大戰」

楊美生本	雲曰「方今天下洶洶、民有倒懸、民有倒懸之急、雲願從仁義之主、以安天下。」瓚大喜、遂同趙雲歸寨、整頓軍馬。次日分作兩隊、馬五千餘匹、其中大半皆是白馬。
劉榮吾本	雲曰「方今天下洶洶、民有倒懸之急、雲願從仁義之主、以安天下。」瓚大喜、遂同趙雲歸寨、整頓軍馬。次日分作兩隊、馬五千餘匹、其中大半皆是白馬。

この例を見ると、楊美生本には劉榮吾本の「馬五千餘匹、其中大半」の九文字がない。だからといって楊美生本で文意が通じる以上、誤りとはいえない。しかし周曰校本や余象斗本など他の系統の諸本にはこの語句があり、この語句のあるほうがもとの形ではなからうか。したがってこの例からは、劉榮吾本から楊美生本が出た可能性が考えられる。

このように楊美生本と劉榮吾本の間には、例十一・例十二のような例が同時に存在することから、この両本も横の關係にあるといえる。

続いて北京図本について述べる。曹操暗殺計画が発覚し、曹操はその首謀者のひとりの劉備がいる徐州を攻め下した。曹操は続いて関羽が守る下邳を囲み、関羽を降参させようと、張遼を使者として遣わした。張遼は関羽に会い、今ここで死ぬのは三つの罪にあたる」と説く。

○例十三 卷五 「張遼義取關雲長」

朱鼎臣本	遼曰「當初、使君與兄結義、誓同生死、近日使君散于小沛、着兄據守下邳。今兄欲死於此地、倘若使君復出、望兄相助、若不在、可不負却孤主而背當年之誓、誤主喪身、誠為不美。其罪一也。兄深通經史、以義為重、令兄家眷附兄護守。今城池已破、受人之託、不能忠人之事、自謂身至極地、視死如歸、豈不誤人所託。其罪二也。兄武藝超群、當為國家出力、不思為使君扶助漢室、拯救生靈、徒欲赴湯蹈火、以成匹夫之勇、上負祖宗、下辱其主、安得為義。其罪三也。兄有三罪、弟不得不告。」	遼曰「當初劉使君與兄誓同生死、近日使君既失小沛、公復戰死於此、復出、望兄相助、若不在、可不負却孤主而背當年之誓、誤主喪身。其罪一也。君深明春秋、以義為重、今使君家眷令公保護。	遼曰「當初劉使君與兄誓同生死、近日使君失却小沛、着兄據守下邳。今兄欲戰死於此、倘若使君復出、望兄相助、若不在、可不負却孤主而背當年之誓、誤主喪身、誠為不美。其罪一也。兄深通經史、以義為重、今使君家眷附兄保護。
楊美生本	遼曰「當初、使君與兄結義、誓同生死、近日使君散于小沛、着兄據守下邳。今兄欲死於此地、倘若使君復出、望兄相助、若不在、可不負却孤主而背當年之誓、誤主喪身、誠為不美。其罪一也。兄深通經史、以義為重、令兄家眷附兄護守。今城池已破、受人之託、不能忠人之事、自謂身至極地、視死如歸、豈不誤人所託。其罪二也。兄武藝超群、當為國家出力、不思為使君扶助漢室、拯救生靈、徒欲赴湯蹈火、以成匹夫之勇、上負祖宗、下辱其主、安得為義。其罪三也。兄有三罪、弟不得不告。」	遼曰「當初劉使君與兄誓同生死、近日使君既失小沛、公復戰死於此、復出、望兄相助、若不在、可不負却孤主而背當年之誓、誤主喪身。其罪一也。君深明春秋、以義為重、今使君家眷令公保護。	遼曰「當初劉使君與兄誓同生死、近日使君失却小沛、着兄據守下邳。今兄欲戰死於此、倘若使君復出、望兄相助、若不在、可不負却孤主而背當年之誓、誤主喪身、誠為不美。其罪一也。兄深通經史、以義為重、今使君家眷附兄保護。
北京図本	遼曰「當初、使君與兄結義、誓同生死、近日使君散于小沛、着兄據守下邳。今兄欲死於此地、倘若使君復出、望兄相助、若不在、可不負却孤主而背當年之誓、誤主喪身、誠為不美。其罪一也。兄深通經史、以義為重、令兄家眷附兄護守。今城池已破、受人之託、不能忠人之事、自謂身至極地、視死如歸、豈不誤人所託。其罪二也。兄武藝超群、當為國家出力、不思為使君扶助漢室、拯救生靈、徒欲赴湯蹈火、以成匹夫之勇、上負祖宗、下辱其主、安得為義。其罪三也。兄有三罪、弟不得不告。」	遼曰「當初劉使君與兄誓同生死、近日使君既失小沛、公復戰死於此、復出、望兄相助、若不在、可不負却孤主而背當年之誓、誤主喪身。其罪一也。君深明春秋、以義為重、今使君家眷令公保護。	遼曰「當初劉使君與兄誓同生死、近日使君失却小沛、着兄據守下邳。今兄欲戰死於此、倘若使君復出、望兄相助、若不在、可不負却孤主而背當年之誓、誤主喪身、誠為不美。其罪一也。兄深通經史、以義為重、今使君家眷附兄保護。

引用部分について朱鼎臣本と楊美生本を比べてみると、両者の間には多少の文字の異同の他、文章の繁簡に差が認められ、楊美生本の方がより簡略になっている。たとえば、朱鼎臣本にある「倘若使君復出、背当年之誓」の部分が楊美生本にはなく、同様に朱鼎臣本の「今城池已破、自謂身至極地」が楊美生本にはない。このような例は引用部分だけでもまだいくつか指摘できる。これは第一節で述べたように、同じ「関索」系諸本の中で別々のグループに属していることを示す一例である。そこで北京図本をみてみると、「第一の罪」は朱鼎臣本に近く、「第二の罪」・「第三の罪」は楊美生本に近くなっていることがわかる。

このように、北京図本の全体（残存する巻五―七）の傾向としては例十三の後半のように楊美生本に近いのであるが、ところどころ例十三の前半のように朱鼎臣本に近い。すなわち北京図本には時折「志伝グループ」の文章がみえることがある。このことから、北京図本は「英雄志伝グループ」の中で楊美生本や劉榮吾本よりも古い段階で楊・劉両本から分かれた版本なのではないかと考えられる。

最後に聚賢山房本について述べる。この本の文章はどのようなになっているのだろうか。先に示した例十一・十二と同じ個所を挙げる。

○例十一―(2) 聚賢山房本卷一 「袁紹孫堅奪玉璽」

表與袁紹至好、隨即差副越・蔡瑁引兵一萬出城攔住。孫堅問曰「汝何故引兵截吾去路。」越曰「汝如何盜傳國玉璽。即忙納下、放汝過去。」堅怒、令黃蓋出馬。與蔡瑁戰數合、瑁勒馬便走。堅乘勢殺過界口。

○例十二―(2) 聚賢山房本卷一 「趙子龍盤河大戰」

雲曰「方今天下洶洶、民有倒懸之急、雲願從仁義之主、以安天下。」瓚大喜、遂同趙雲歸寨、整頓軍馬。次日分作兩隊殺出。皆是白馬。

例十一・十二について、聚賢山房本と他の「英雄志伝グループ」諸本とを比べてみると、聚賢山房本の文章は楊美生本にとっても近い。そしてこれが全体の傾向といえる。しかしまれに次のような例もみられる。

○例十四 卷一 「廢漢帝董卓弄權」

楊美生本	聚賢山房本
宮女報李儒至、帝后大驚。儒曰「春日融和、董太師特上壽酒。」帝泣曰「何相逼太甚。」	宮女報李儒至。帝后大驚。儒曰「春日融和、董太師特上壽酒。」帝泣曰「何相逼太甚。」儒曰「壽
太后曰「既云壽酒、汝當先飲。」儒怒曰「汝母子不飲。」	太后曰「既云壽酒、汝當先飲。」太后曰「既云壽酒、汝當先飲。」儒曰「爾母子不飲。」

引用箇所、魏□本は楊美生本と同じ。聚賢山房本もほぼ楊美生本と同じではあるが、やや言葉遣いが違っている。たとえば、聚賢山房本の「儒曰『壽酒無疑。』」が楊美生本にはなく、また楊美生本の「儒大怒曰」が聚賢山房本ではただ「儒曰」となっている点がそれである。このような例も存することから、聚賢山房本は楊美生本や魏□本を祖本とするというより、両本とは横の關係にあると考えたほうがよからう。

聚賢山房本にはもう一つ指摘すべき特徴がある。それは聚賢山房本の冒頭部分の文章は他の「閑索」系諸本と異なり、周曰校本をはじめとする十二卷系諸本と一致するといふことである。しかしこの点は聚賢山房本の卷一第五則「呂布刺殺丁建陽」までに限られ、それ以降はこれまで述べたように「閑索」系諸本の「志伝グループ」としての特徴を備えた文章となっているのである。つまり聚賢山房本は、第五則までは内容の詳しい十二卷系の文章、第六則以降は簡略な「閑索」系の文章をしている。「龍頭蛇尾本」といえる。これは何を意味するのであろうか。

聚賢山房本の封面には「毛声山先生原本」と題していた。しかし聚賢山房本にはどこにも毛宗崗の批評はみえない。この「毛声山先生原本」を毛宗崗本凡例中の「古本」と理解することもできない。「古本」の存在はすでに小川環樹

博士によって否定されている¹⁵。また毛宗崗本の事実上の底本であろう「俗本」と解することもできない。毛宗崗本の底本は「李卓吾先生批評三國志」に違いなく、聚賢山房本は版式が呉観明本などとまったく異なっている。すなわち聚賢山房本は毛綸(毛宗崗の父、号は声山)・毛宗崗とまったく關係ないのである。

聚賢山房本が出版される時、毛宗崗本はすでに出版されており、好評を博していたのだらう。そのような状況の中で、書肆聚賢山房は他の書肆から出ている好評の毛宗崗本に対抗するため、より安価な本を出さなければならなかった。そこで分量的に少ない「閑索」系諸本の中の一つを底本に選んで、聚賢山房刊の『三國志演義』を作った。その時封面に「毛声山先生原本」と題し、首巻に人物の図像をつけ、さらに本文のごく初めの部分だけに十二卷系諸本の中の一冊を採用した。このようにして、安価ながら、いかにも由緒正しい『三國志演義』を装ってできたのが聚賢山房本なのではないだろうか。

四

以上、「志伝グループ」、「英雄志伝グループ」それぞれに属する諸本の相互關係をみてきたのだが、ではこの二つのグループはどのように関わりあっているのだろうか。このこ

とについて、いわゆる「関索説話」の点から考えてみたい。
 ○例十五 卷十五 「孔明興兵征孟獲」

周曰校本	劉龍田本	楊美生本
共起兩川甲兵五十萬、前往益州起發。忽有	共起 川 兵五十萬、前往益州進發。忽報有一少年將、單騎來到、不知爲誰。孔明令人探之、	共起 川 兵五十萬。忽報有一少年將軍、單騎來到、不知是誰。孔明召人、少年將軍入見拜曰「某乃雲長第三子關索也。」
第三子關索、入軍來見孔明曰「自因荊州失陷、逃難在鮑家莊養病、每要赴川 見先主 報仇、瘡痕未合、不能起行。近日安痊、打探得東吳仇人已雪、逕來西川見帝、恰在途中遇見 征南之兵、特來投見。」孔明聞之嗟呀不已、一面遣人申報朝廷、就令關索充爲前部先鋒、一同征南、大隊人馬、各依隊伍而行、飢餐渴飲、夜往曉行、所經之處、秋毫無犯。	雲長第三子關索、是來見孔明曰「自因荊州失陷、逃難在鮑家莊養病、每要來見先主 報仇、瘡痕未合、不能起行。近日安痊、逕來見帝、今遇丞相南征、敬來投見。」孔明聞知感歎不已、一面差人申報朝廷、就令關索爲前部先鋒、	自因荊州失陷、逃難在鮑家莊養病、每要赴川來見先主爲父報仇、奈瘡痕未合、不能起行。近日得痊、
三軍所經之處、秋毫無犯。	三軍所經之處、秋毫無犯。	三軍所經之處、秋毫無犯。

周曰校本は卷九。十二卷系諸本・「関索」系諸本において関索が初めて登場する場面である。三本の文章を比較すると、三本とも内容に大差はない。しかし周曰校本の文章は劉龍田本・楊美生本とやや違ふところがある。引用の始めの部分では、周曰校本は「忽有関公第三子関索」と「関索」の名前がいきなり出てくるが、劉龍田本では一人の若い將軍が一人やってきて、軍中の知る者によってそれが関索とわかり、楊美生本でも諸葛孔明が招き入れると関索であることがわかる。つまり劉・楊両本では関索の名前が出てくる前に一段階が設けられている。また引用の後半部分では、たとえば周曰校本の「一同征南、大隊人馬、各依隊伍而行、飢餐渴飲、夜往曉行」が劉・楊両本にはないなど、周曰校本に比べて劉・楊両本のほうが簡略になっているといえる。

関索に関わる別の例を挙げよう。諸葛孔明が関索を連れて南蛮征伐に出かけるが、その第四・第七回目の時のこと。
 ○例十六 卷十五 「孔明四擒孟獲」

周曰校本	劉龍田本	楊美生本
孟獲等一齊場到陷坑之中、只見大林之内轉出 魏延 引 數百軍來、一個個拖出、用索縛定。	孟獲等一齊倒在陷坑之内、大林之中轉出 魏延、引 數百軍來、	孟獲等一齊踏入陷坑之中、轉出 魏延、將 孟獲並蠻兵縛定。

周曰校本	劉龍田本	楊美生本
却令張疑・馬忠引本部所降蠻兵千人如此行之。孔明笑曰「今番一戰、須要全功。」各邊、今要全功。」	却令張疑・馬忠引本部所降蠻兵千人如此而行。孔明笑謂關索曰「汝宜謹靠吾身之便、今要成功。」	却令張疑・馬忠引本部所降蠻兵千人如此而行。孔明笑謂關索曰「今番一戰、便要成功。」關
人忻然而去。		索忻然而去。

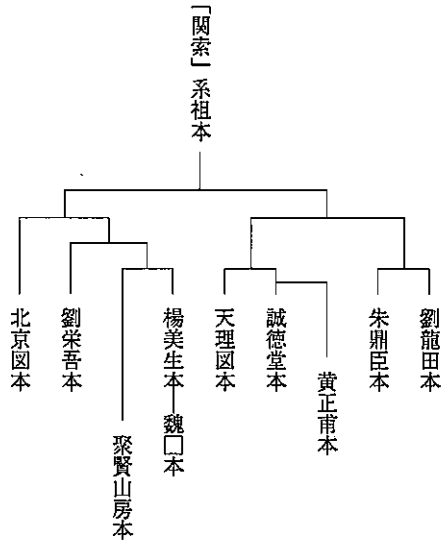
例十六・例十七とも周曰校本は卷九。例十六・例十七をみると、三本とも文章が微妙に異なっているが、注目すべき違いとして、劉龍田本・楊美生本には「関索」の名前が見えるが、周曰本にはない点が挙げられる。例十五で示したように、周曰校本を始めとする十二卷系諸本（嘉靖本は除く）と劉龍田本や楊美生本を始めとする「関索」系諸本では、関索の登場のしかたは概ね一致するのであるが、ただ例十六・例十七に挙げたところだけがこの両者の間で異なっている。そして劉龍田本と楊美生本（すなわち「志伝グループ」と「英雄志伝グループ」）では関索の登場のしかたはほぼ完全に一致する。このことから、「志伝グループ」と「英雄志伝グループ」はやはり同一系統なのであり、十二卷系諸本と「関索」系諸本とは別々の系統とみるべきで、他の系統よりも近い関係にあることが確認できよう。

そしてこの二つのグループの文章も、例一・例二に示したように「志伝グループ」と「英雄志伝グループ」とでいくらか違いは見られるが、一方両者の文章がほぼ一致するような例も作品全体にわたって見い出せるのである。つまりこれは十二卷系諸本や「花関索」系諸本よりも文章が簡略な「志伝グループ」と「英雄志伝グループ」に共通する祖本があったことによるのではないだろうか。その祖本を「関索系祖本」と呼ぶことにしよう。「三国志演義」のより原作に近い段階から、文章が簡略化されて「関索系祖本」ができ、そこからさらに二つのグループに分かれて、朱鼎臣本や楊美生本をはじめとする現存する「関索」系諸本ができたのではないだろうか。

結

以上で現存する「関索」系諸本の相互関係を具体的に示しえたと思う。上田望氏が述べるようにこれらの諸本は縦の継承関係にはないが、諸本の文章を子細に検討すると、親疎遠近の関係は明らかにすることができる。今その関係を図示すると次のようになろう。

本稿の最初でも述べたように、『三国志演義』の諸版本は三つの系統に分けられる。本稿ではその第三の系統について述べた。ではこれら三つの系統はどのように関わっているのだろうか。これについては稿を改めて論ずることにはしたが、このことを深く検討することによって、『三国志演義』の現存諸版本以前の様相、さらには中国古典小説史のさまざまな問題が浮かび上がってくるのではないかと思う。



- 注
- (1) 『小説月報』二十卷十号、一九二九年。
 - (2) 小川環樹著『中国小説史の研究』（岩波書店、一九六八年）所収。原載は、小川・金田訳、岩波文庫『三国志』（旧版）第八冊付録。
 - (3) 金文京『三国志演義』版本試探—建安諸本を中心に—（『集刊東洋学』第六十一号、一九八九年）。
 - (4) 上田望『三国志演義』版本試論—通俗小説の流伝に関する一考察—（『東洋文化』第七十一号、一九九〇年）。
 - (5) 周兆新『旧本『三国志演義』考』（周兆新著『三国志演義考評』北京大学出版社、一九九〇年）。
 - (6) 拙論『三国志演義』版本の研究—毛宗崗本の成立過程—（『集刊東洋学』第六十一号、一九八九年）。
 - (7) 上田氏は、注4前掲論文において、嘉靖本・毛宗崗本、『二刻英雄譜』をそれぞれ独立した一グループにしているが、嘉靖本と毛宗崗本は、筆者が注6前掲論文で述べたように、また『二刻英雄譜』は小川環樹博士が述べられているように（『京大漢籍善本叢書』『二刻英雄譜』解説）、周曰校本などと同じ十二卷系諸本に分類することができよう。
 - (8) 注4前掲上田氏論文。
 - (9) 十二卷系諸本については注6拙論、二十卷「花関索」系諸本については、拙論『三国志演義』版本の研究—建陽刊「花関索」系諸本の相互関係—（『日本中国学会報』第四十四集、一九九二年）参照。
 - (10) 十二卷系諸本の中の「李卓吾先生批評三国志」にも「藜光樓檀槐堂本」があるが、劉修業女史が述べるように、両者は別の書肆であろう（『古典小説戯曲叢考』）。

(11) 毛宗岡本の成立年については、小川環樹訳、岩波文庫（旧版）『三國志』第一冊解説参照。

(12) 以下巻数は、特に断らないかぎり二十巻本のものを示す。

(13) 劉栄吾本が周曰校本などを参考に補った可能性も考えられる。しかし劉栄吾本には他の版本を参考にして文章を書き換えたという例は他に見いだしがたく、その可能性は小さいと思う。後述の北京図本も同様であろう。

(14) 同様のものとして、『西遊記』の朱鼎臣本『唐三藏西遊傳』が知られる。太田辰夫『唐三藏西遊伝』（朱本）考』（太田辰夫著『西遊記の研究』 研文出版 所収）参照。

(15) 注11前掲小川博士論文参照。

(16) 注6前掲拙論参照。

(17) 首巻に人物の図像があるのは、現存毛宗岡本の一般的な体裁である。